

---

# 真白の空

山田太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真白の空

### 【Nコード】

N7860Y

### 【作者名】

山田太郎

### 【あらすじ】

誰が……何のために……

TYPE・MOONの世界に放り込まれた少年が送る日常と非日常。記憶が混濁し、自分自身の事ですら、まともに思い出せない彼に残されていた僅かなTYPE・MOONの知識の断片。その意味とは？

これは僕の罪滅ぼしだ……だから、どうか僕に君を救わせてもらえないだろうか。

第一章 魔眼『歪曲』から始まる物語。

## プロローグ（前書き）

趣味で書いたような小説です。  
駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

## プロローグ

俺は宙を舞っていた。  
車に撥ねられたのだ。

それにしても、時間の流れが遅く感じるんだが……あと、なんか俺の生きた15年の間に起こった出来事が頭によぎっている。なるほど、これが走馬灯というやつか。

地面に思いきり叩きつけられた。

そこで俺の意識がシャットダウンした

「あつ　ぐつ」

体中の激しい鈍痛によって目が覚めた。

見覚えのない場所。

薄暗く、埃っぽい。お世辞にはきれいとは言えない。

よくよく見れば、オフィスのようにも見えなくもない。

……何処だ？ここ。

「やっと目を覚ましたようだな」

見知らぬ女の人がいた。整った顔立ちに鋭い切れ目、髪の毛はくすんだ赤色。パリッとした真っ白なシャツに黒のパンツをはいている……かなりの美人だ。

「かれこれ二日は寝ていたぞ。それにしても、なかなか面白いものを拾った　どうだ、声は出せるか？」

「あー、あー……大丈夫です。えと……どうして俺はこんな所にいるんですか？」

「こんな所とは失礼だな。私は蒼崎橙子。封印指定を受けた人形師だ。君ならもう知っているんじゃないか？」

はい？……どうやらこの人は頭のネジが飛んでいるらしい。そりゃ、俺は蒼崎橙子という人物を知っている。しかし、それは『空の境界』という創作があり、その中の登場人物だ。

確か物語の内容は……あれ？大雑把なことしか思い出せない。

「どうした？信じられないか？まあ、無理はないがな」

クツクツクツと俺の反応を見て笑っている。

どうやら性格まで似ているらしい。

「それはコスプレですか？完成度高いですけど仮に本当だとして、その証拠は？」

俺は挑発するように聞いた。

「ふん。だったら見せようじゃないか」

そういつてパチンと指を鳴らした途端、デスクの上の紙が燃えあがった。

……マジか。いやいや、何か仕掛けがあつたに決まってる。そうだ、親に連絡して迎えに来てもらおう。こんなわけのわからない所にこれ以上長居したくない。

「電話はどこにありますか？」

「そこだ」

女性は黒電話を指さしていた。今時黒電話か、おばあちゃんの家で見たぞあれ。

「ちょっと借ります」

俺はズキズキと痛む体を引きずるようにして電話の所まで行く。そしてダイヤルを回す。

07 - - 98 っと。

この番号は現在使われておりません。

落ち着け、俺よ。

黒電話なんて慣れてないから間違えたただけだ。次は慎重に。

この番号は現在使われておりません。

冷や汗が垂れてきた。動機が激しくなる。

蒼崎橙子（仮）の方を見るとニヤニヤと笑っていた。

「マジかよ、おい。勘弁してくれ」

そのあとも何度も何度もダイヤルを回していた。

知り合い、学校など知っている番号全てに電話をした。しかし、無情にも聞こえてくるのは

この番号は現在使われておりません。

「もう満足したか？いい加減こっちも飽きてきた」

「なん……で………いったい………うそ………だろ？」

くらくらとする。

呼吸がうまくできない。

苦しい。

そして、俺の視界は暗転した

目が覚めた。

あたりを見渡すと、さっきの蒼崎橙子（仮）がデスクに座ってタバコを吸っていた。

こっちは一応怪我人なんだが。やめてほしい。ちなみに俺はタバコが大嫌いだ。

「あなたが治療してくれたんですか？こんな見ず知らずの男をわざわざ拾って治療するなんて、どうして」

「いや、外から帰ってくるとこのビルの前に倒れてたんでな。見てみると、なかなかどう

して興味深い。だからだよ。まあ、怪我に関しては心配しなくてもいい。私は仮にも人形師だからな」

「それはどうも。でも俺の何が興味深いっていうんです？」

「お前の頭の中の記憶を覗かしてもらったんだが驚いた、お前の記憶の断片によると、この世界は創作ということになるな。これ以上、

興味深いことがあるか？あとは、そうだな……………お前が昔の知り合いにかなり似ていてね。しかし、どうも人違いだったようだ。それにしても、お前さっきから黙って聞いているがやっと思じる気になったのか？」

「信じられないですけど、信じるしかないでしょう……………」

もう訳がわからん。どうやら俺は本当に型月の世界に来たらしい。どんなテンプレ展開だよ、まったく……………それにしても、何でこの人こんなに落ち着いてるんだ？普通、自分の存在が創作だなんて聞いたら、こんな風に面白そうな玩具を見つけたような顔なんてしないぞ。まあ、この人なら当然か。

「俺はこれからどうすればいいんだ……………元の世界に帰れることはできるんですか？」

ちなみに、前の世界には全く未練はない。いや、あるのか、ないのかすらわからない。あまりに記憶が抜けすぎてる。こうして『空の境界』の知識があること自体が奇跡だ。

「帰れるかどうかはわからんが、お前、住むところないだろう。なんならこの場所に泊めてやってもいい。もちろん無料で」

この人こんな親切な人だったか？そう思いながら顔を見る。

……………明らかに実験対象を見る目だった。大丈夫か？俺。

大丈夫だ、問題ない……………はず。だいたい、泊まる宛もないし、怪我もしている。ホームレス生活なんてのは御免だ。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。俺の名前は……………あれ？」  
名前が思い出せない。何でだ？



「名前がわからないのか？記憶を覗いたときもそかなりの部分は霧がかつていたからな。ちなみに無理に思い出そうとするな。廃人になるぞ。」

お前の存在はこの世界では不安定だ。前の記憶を無理に思い出そうとしたらこの世界に消されることになりかねん」

マジかよ。

俺は思い出すことをやめようとするが、そんな都合よくはいかない。

やばい、さっきと似たような症状が出てきた。

## 本日二度目の意識消失

## プロローグ（後書き）

読んでくださりありがとうございます。  
感想等お待ちしております。

## 第一話 (前書き)

趣味で書いたような小説です。  
駄文ですがよろしくお願ひします。

## 第一話

ここにきて三年がたった。ちなみに現在1998年7月。朝起きると橙子さんがコーヒーを飲みながらテレビのニュースを見ていた。

「おはよう、橙子さん」

「ああ、おはよう。それよりもこのニュースを見てみる」

「なにか、面白い事件でもあったの？」

朝食の準備をしながら僕もテレビを見る。

その内容はというと、  
とある廃墟で四人の男性と思われる遺体が見つかった。遺体はバラバラで切断面は捻れたようになっていたとのことだった。

「朝からへビーな内容だね。でもこれって確か」

三年の月日で曖昧となった記憶を落ち着かせながら引つ張り出す。そう慎重に、慎重に、そうしないとまた世界の拒絶症状に襲われる。

記憶の取り扱いについては橙子さんに調k y……じゃなかった、訓練してもらった。

そして、この世界で生きていくうえで新しい名前も貰った。

蒼崎 真白

これが僕の名前。え？なぜ苗字が蒼崎かって？

ああ、それは僕が橙子さんの養子になったから。おい、そこドン

引きするな。あくまで戸籍の上だけだからさ。別に僕は橙子さんのことを母親だとは思っていない。逆に橙子さんのことを母さんと呼ぶことを 想像しただけで寒気がする。

まあ、むこうはどう思ってるかは知らないけど。

しばらく、症状が落ち着いてきたところに橙子さんに魔術師の弟子入りをした。

嫌がられると思ったけど、案外すんなり了承してくれた。

ちなみに橙子さんによると僕の魔術回路は23本。元々は25本くらいあつたんだけど、ちょっといろいろあつて減ってしまった……。

作る、直すといったことの才能があるらしい(この時、若干橙子さんは嬉しそうだった)が、その他のことに関しては才能の欠片もないといわれた。ちょっと、涙目になったのを覚えている。

いろいろあつた三年間だったけど、本当に橙子さんには感謝している。

絶対に本人には言わないけど……

でも、いつかこの恩は必ず返すつもりだ。

っと、話しが逸れてしまった。

「これって、確か……アサ、ガミ……」

うーん、思い出せるのはこれだけ。記憶の処理がうまくいかない。

「おい、あまり無理をするな」

「そうだね。時間が経つとどうにも……ここ最近は昔の記憶なんて思い出そうとしなかったから」

「年のわりに年寄りくさいことを言うじゃないか」

口元をニヤリとさせて、からかうように言う橙子さん。  
この言葉にイラツときた。

「だって、しょうがないじゃないか!!こればかりは!!」

「悪かった、悪かった。まあ、きっかけがあれば思い出すだろうさ」

全然、悪びれてないんだけど……この人。

「はあ、もういいよ。じゃあ、行ってきます」

ちなみに、僕は高校生三年生です。見習い魔術師でも高校生をしてもいいんです。

鮮花さんだってそうだしね。

食器を片付けて玄関へと向かう

「行ってらっしゃい、真白」

背後から、橙子さんの猫撫でボイスが聞こえた。

頼むからやめてください……

家に帰ると、幹也さんと式が来ていた。

常に全身を真っ黒な衣服で覆っている幹也さん。ちなみに、かけている眼鏡のフレームも黒い。もしかして、幹也さんって厨二病なんじゃないかと時々思う。

式は薄い紺の着物を着ている。それだけなら、とても似合ってい

るのだけどね……さらにその上に赤のジャケットを羽織るといっ流  
行の最先端を走る強者だ。つわもの

「ただいまー」

「おかえり、真白君」

いつもは穏やかな顔をしている幹也さんが珍しく顔を引きつら  
し  
て言った。

「真白君からも橙子に言ってよ。橙子さん今月分の給料払ってく  
れ  
ないんだ」

「は？ちよつと、どついうこと橙子さん？」

「いや、ちよつと高い買い物をしたんだ」

橙子さんはタバコを啜えながら答える。

タバコは駄目だつて言ってるのに……受動喫煙、受動喫煙。

「何買ったの？」

「どうせ、くだらないものだろうな。」

橙子さんは時々、衝動的に物を買う癖がある。さらに性質の悪い  
こと  
にそれは役に立たない上に高価な代物ばかりだ。その所為でど  
れ  
だけ苦勞してきたことか。

「ビクトリア朝の頃のウイジャ版だ。効果はあまり期待できないが、  
成  
ってから百年近く経っているから無価値という訳でもない。どん  
な  
につまらない物でも、そこに魔術の痕跡と長い年月があれば付加

価値が生まれる。ま、それでも役立たずには変わらない。分類する  
なら趣味の一品というやつかな」

「やっぱり、くだらないものじゃねえか!?!」

っと……ツッコミに熱が入ってキャラがおかしくなっちゃった。  
アブナイ、アブナイ。

幹也さんもそんな驚いた顔しないで。キャラが崩れることぐらい  
誰にだってあるんですよ？

「ゴホン、駄目だつて。さすがに給料は払わないと。大体、橙子さ  
んはいつも無駄なもの買って金欠になるだから、少しは自重しよ  
う」

「無駄なものとは聞き捨てならないな。お前も魔術師の端くれなら  
物の価値ぐらいわかるだろう」

「僕は使えないものは買ったことはないよ!?!」

「ふーん? だつたら、お前の机の引き出しの底にしまってたの  
はなんだ? あれは使えるものなのか?」

うわっ、……ま、まさか僕のコレクションが見つかっただど?

「なんで人の机の中勝手にあさるのさ!?!」

「あれは、一体何に使った? 教えてくれ」

橙子さんは意地の悪い笑みを浮かべて聞いてくる。なんで、そん  
なところだけ母親っぽくなるんだ……。これされたら、健全な青少



年はかなり傷つくんだよ！？くそっ、今度机に結界でも張っておこう（泣）。あんまり意味ないと思うけど……

「くっ……幹也さん、本当にすみません。来月は必ず払いますから今月は勘弁してください。このとおりです！！」

そういつて僕は頭を下げる。

「や、やめてくれてっ、真白君。しょうがないから、僕は友人にでも借りるよ」

「本当にすみ私にも、貸してくれないか？」

「全力でお断りします」

幹也さんは思いきりドアを閉めて出て行ってしまった。

「いい加減にしないと幹也さん辞めちゃうよ！橙子さん！！」

「トウコ、話の続き」

僕たちのやり取りの一部始終を見ていた式さんはよつやく口を開く。ごめん、式さんのこと空気にしてしまった。

「そうだったな。あまりこの手の依頼は受けたくないんだが、先立つものがないのでは生きていけないものね。……まったく、錬金術師でもないのに金銭に窮するとは。これというのも黒桐が金の融通してくれないからだぞ」

橙子さんは不愉快だ、と吸殻を灰皿に押し付けた。  
いや、それアンタの自業自得でしょ。まったく、幹也さんはそれ  
以上に不愉快に思ってるはずだよ。

「ところで依頼って何？」

僕は気になったことを聞いた。

「今朝の殺人事件のことだね。依頼主は犯人に心当たりがあるとの  
事だ。仕事の内容はその犯人を可能なら保護すること。だが少しで  
も抵抗するようなら　ためらわず殺してほしい、とさ」

「それはまた物騒な……まあ、式さんなら大丈夫だと思うけどさ」

「何をいつているんだ？真白、お前もこの仕事をするんだぞ」

「……………は？ゴメン橙子さん、もう一回言ってくれろ？」

「だから、お前もこの仕事をするんだ」

さも、それが当たり前であるかのように言う橙子さん。

こっちは開いた口が塞がらない。

「む、無理だって、僕は式さんみたいに戦えるわけじゃないし……  
それは橙子さんが一番わかってるでしょ？」

そう、僕は戦闘の才能など皆無だ。あるのは作ること、直すこと  
の才能のみ。というか、それ以外なんてゴミ屑以下だ。

いやね、僕だって努力はしたよ？式さんに頼んで稽古つけてもら

いましたよ。

その結果が全然上達の見込みなし！おまけにあまりにも僕がつまらないから式さんがキレて、ボコボコにされ全治2週間の怪我まです。

「お前が魔術の修行を始めてもう三年になる。そろそろ、テストでもしてみようと思ってね」

「い、いや、でもさ。こ、これ、明らかに命がけになるっぽいんだけど」

あまりのことですまく喋れない僕。ヘタレと馬鹿にしてくれてもかまわない。

「魔術師なんてそんなこと日常茶飯事だ」

嘘、絶対嘘、だって魔術師って学者でしょ。そういふことするのに限られた人だけのはず。そう……だよな？  
……でもまあ、仕事だし少しでも恩を返そう。

「けれど、何もお前だけで戦わせるわけじゃない。お前は式の援護をしろ」

「はあ、わかったよ……」

「じゃあ、ほら、相手の顔写真と経歴だ」

そう言って式さんに資料を投げる橙子さん。けど式さんはそれを受取るうとせず、資料は床にパサリと落ちる。

「いらぬいよ。そいつは間違ひなくオレと同類。だからきつと、会つた瞬間に殺し合つ」

「いやいや、式さん、直感だけで殺すつもりですか？それは駄目だつて。間違えてたら、シャレにならないよ。間違ひに気づいて謝つても、相手はすでに肉片になつてる。

僕は床に落ちた資料を拾ひ、中を確認する。

アサガミフジノ 浅上藤乃

そこには、黒い髪の長い少女が写つていた。かなりの美少女だ。

その瞬間、頭の中で何かガチリとはまった音がした。

「 思い出した」

## 第一話 (後書き)

読んでくださりありがとうございます。  
感想等お待ちしております。

## 第二話（前書き）

趣味で書いたような小説です。  
駄文ですがよろしくお願ひします。

## 第二話

思い出した。

彼女の悲惨な過去を。

彼女が受けた辱めを。

彼女のその苦しみを。

最低だな、僕は。本当に最低だ。

何が忘れていた、だ。思い出そうと思えば思い出せたのに……

今から僕にできることは何だ？

彼女を保護すること？

否、

彼女を殺すこと？

否、

彼女を救うこと。

そのどうしようもない苦しみから救ってみせる。

何年かかろうと、絶対に。

何様だと罵られてもかまわない。

あの時のように手を放してなるものか。

「どうした？」

橙子さんが僕の顔を見て訝しげに聞いてきた。

「いや、ちょっとね……」

「ふん、どうやらやる気になったようだな」

橙子さんがいつの間にか2本目のタバコを啜っていた……もう何も言わない。

「この件に関してはね、手を抜くつもりはないよ。全力でやらしてもらおう」

じゃあ式さん、外に出ようか」

そう言っ て僕は外に出るための準備に向かう

……結局、この日は見つけることができなかった。

こっししている間にも彼女は人を殺すのだろう。

わずかな焦りと苛立ちが僕の心を支配する。

人を傷つけるとね、傷つけた人は心が切り刻まれてバラバラになっ てしまうのよ

ある少女が僕に言い聞かせた言葉だ。

浅上藤乃はもはや心がバラバラになっ てしまっ ていることだろう。

このままだと心が死んでしまっ とう。

心すら本当の化物になっ てしまっ とう。

「くそ……」

僕は頭を抱えながら、苛立ちを露わにしまっ とう。

「焦っ てもどうしようもないだろう。まっ たく、お前は神経質すぎるんだ。少し落ち着け、紅茶でも飲むか？」



橙子さんが呆れたように言って立ち上がる。  
珍しいな、この人が人のためにお茶を入れるなんて……

「……飲む」

余談だが僕は紅茶派だ。どうもコーヒーのように苦いものは駄目だ。

橙子さんは紅茶をコップに入れて僕に渡してきた。

まあ、味は普通だけど心を落ち着かせるには十分だった。

「いやなんだよ、もうあの時みたいなことになるのはさ」

僕はぼそりとつぶやく。

あの時の記憶が蘇る度に辛くてどうしようもなくなる。

記憶の扱いには慣れているので忘れようと思えばできる。けど、

あの記憶だけは忘れてはいけない。たとえ、どれだけ辛くても。

「……」

橙子さんが珍しく黙っている。

「紅茶、ご馳走様。もう寝ることにするよ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

僕は自分の部屋へと向かう。

電話の音で目が覚めた。

幹也さんからだった。なんでも、今日は鮮花さんと喫茶店でお茶の約束していたのだが急用ができていけなくなったらしい。そこで式さんを伝言に行かせたみたいなのだが鮮花さんと式は仲が悪い。よって僕が緩衝剤として駆り出されることになった。

「こんな事してる暇なんてないんだけど……」

僕はアーネンエルベとかいう喫茶店に入る。なかなか洒落ていて良い店だ。今度ゆっくりと来てみよう。

「鮮花さんはどこだ？……っと、いたいた。おーい、鮮花さん」

僕は鮮花さんのいる席へと向かった。

あれ？なんか、もう一人いるぞ。

僕はその顔を確認した瞬間、頭が真っ白になった。

そこには、あの浅上藤乃がいた。

S i d e A z a k a

「おーい、鮮花さん」

誰かが私の名前を呼んだ。声のした方を見ると、兄弟子である蒼崎真白がそこにいた。黒い短髪、赤いフレームの眼鏡を掛けた平凡な顔。

どこからどう見てもその辺りにいる一般人の少年だ。しかし、彼は魔術師である。私が発火の才能しかないのと同様、彼には作る、直すといった才能しかないらしい。けれども、私なんかよりもずっと才能がある魔術師なのだ。認めたくはないけど。

一度、彼が作った人形を見せてもらったことがある。とても美しいと思った。

つい見惚れてしまい時間が経つのを忘れてしまうほどだった。

あの橙子師ですら素晴らしいと褒めていたのだ。

でも、彼はなぜか辛そうに「僕にはこんな事しかできない」と俯いていた。

そんな彼が今、私たちの前で目を見開いて固まっている。

その視線の先は隣の藤乃だった。藤乃も困惑している。

もしかして、藤乃に気でもあるの？でもお生憎様、藤乃は幹也のことが好きなの……ちょっと待って、ここで真白と藤乃をくっつければライバルが1人減るじゃない！！

これはチャンス！！

そんな事を考えていると

「　　すまない、本当にすまない」

なぜ真白はとても悲痛な顔をして藤乃に頭を下げて謝っている。

こんな顔をする真白は珍しい。普段はふざけていて、真面目に話しているのかすらわからないのに。

藤乃はなぜ謝られているのかわからないといった様子。

「　　ちょっとどうしたのよ、真白。ああ、彼は蒼崎真白。ちょっとし

た知り合いよ」

私は困惑しながらも、藤乃に彼のことを教える。もちろん、私が魔術を習っていることは教えない。教えてはいけない。

「ええと、真白さん？どうして私に謝るのですか？」

藤乃は真白に優しく問いかける。

「っ」

その問いかけに彼はビクリと体を震わせる。まるで自分にはそんな風に声をかけてもらう資格などないというふうに。

「本当にすまない……どうか、許してくれ」

「あーちよつと待ちなさい！」

彼は逃げるように出ていってしまった。

どうしたっていうのよ、まったく……

しばらくして来たのは幹也ではなく両義式だった。

「コクトーからの伝言だ。今日は来れないとき。すっぱかされたぞ、お前。それとマシロはまだ来てないのか？アイツも来るってコクトーが言ってたんだけど」

……最悪だ。

さっきの出来事なんて頭から吹き飛んだ私だった。

僕は彼女に話しかける資格などない。

許されるはずなどない。けれども、気付くと僕はひたすら彼女に謝っていた。

「君を救ってみせる。それが僕の本当の謝罪だ」

これは単なる自己満足かもしれないけどそうせすにはいられない。

とりあえず、伽藍の堂に戻って準備しないと……

浅上藤乃には追跡用の使い魔をつけたから問題ないだろう。

もうこれ以上、君に人を殺めさせたりはしない。藤乃さん、ほんとはね、自分の存在を 生きていくということ実感するなんてのは簡単なことなんだよ

今は夜の12時5分。

あのあと僕は伽藍の堂に帰り、すぐに準備に取りかかった。藤乃さんの能力は歪曲の魔眼、何の準備もせずに彼女を止めるのは不可能だ。おそらく僕なんか簡単に殺されてしまうだろう。でもさせない、君には誰も殺させない。

そして今僕は港の倉庫街を歩いている。

突然、使い魔の反応が途切れたのだ。そして、最後の反応地点がここだった。

「確かこの辺りの筈なんだけど……」

その瞬間、何かに蹴躓いた。

「つと。なんだよ」  
足元の物体を見る。

変わり果てた姿になった僕の使い魔が転がっていた。

「<sup>トカゲ</sup>渡影ッ！！」

ああ、これ使い魔の名前ね。基本的には僕は自分の作ったものは名前をつける。それで確かに世界に存在しているという証明になるから。

橙子さんが僕に新しい名前をつけたように  
ネーミングセンスことは言及しないでほしい。名前をつけることに意味がある。

僕は渡影を回収し、先を急ぐ。これぐらいなら直せば大丈夫だろう。普通の魔術師なら処分してるんだろうけどね。

そして僕はさらに足を進める。

潮の匂いに強い鉄さびの匂いが混じる　血だ。

まさか、また殺したんじゃない……

「くそ！……どうか、間に合ってくれ！」

そう言って僕は駆け出した。

僕は走る

間に合ってくれと

しかし、無情にも僕の目に飛び込んできたのは血の海に倒れているのは両足を引き千切られた青年。

そして、それを見つめる少女。

「また殺してしまったんですね、浅上藤乃さん」

彼女は頬を歪ませて笑っていた。

楽しそうに、愉しそうに。だが、僕が誰であるかわかると彼女は目を見開き、その瞳に困惑の色を浮かべる。

「どうして……どうして殺したんですかッ!!」

僕はつい声を荒げてしまった。

その声にビクリと肩を震わせる藤乃さん。その反応はさっきまで残忍な笑みを浮かべていた彼女からは想像できなかった。

「私だって……私だって殺してなんてなかった……」

その声は酷く弱々しく、掠れていた。

そして、彼女は言葉を続ける。

「でも……しないと　こうしないといけないんです……こうすることでは私は人並みにしかなれないから」

「違うッ!! 違うよ、藤乃さん。だって　」

「お前は人殺しを愉しんでいるんだからな、浅上藤乃」

後ろから聞こえてきた凜とした声に僕は慌てて振り返る。  
そこには眼を蒼く輝かした両儀式がいた。



## 第二話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。  
感想等お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7860y/>

---

真白の空

2011年11月23日23時45分発行